

青年期のコラージュ制作と自己との関連  
－制作前後の20答法および半構造化面接から－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
檜原 明穂

本研究では、青年期のコラージュ制作と自己との関連に着目し、コラージュ制作と自己形成との関連を検討することを目的として研究を行った。対象者は青年期中期と後期にあたる高校生10名、大学生20名であった。個別に「自分」をテーマとしたコラージュ制作を行い、その前後に20答法への回答を求めた。20答法は田辺・沢宮（1999）に従って回答の分類を行い、制作前後での回答の変化を検討した。その後制作されたコラージュ作品について半構造化面接を行い、修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（**Modified Grounded Theory Approach : M-GTA**）で分析を行った。20答法の分析の結果、高校生では願望に関わる記述が増加した。大学生では所属に関する記述が減り、外的事物に関しての記述が増加した。M-GTAの結果、高校生においても大学生においても、選ぶ段階が重視された。「好きなもの」や「日々の活動」といった自分と関連した切り抜きを選び、抽出することにより、自分にとって重要な領域や自己像が明確になったと考える。大学生は、切る段階で素材を加工することにより、より自分を投影しやすくなった。また、画用紙上に切り抜きを配置・構成する段階は、それぞれの自己像を統合することに関わると考えられた。制作後に作品を眺めることにより、作品の特徴や自分の性格に気づいたりするが、よりコラージュ作品と自己とを関連づけ、内的作業を進めていくためには、「自己への問い」があることが重要であることが示唆された。